

公益社団法人日本薬剤学会 2016 年度事業報告

(2016 年 4 月 1 日から 2017 年 3 月 31 日まで)

公益目的事業 1 「薬剤学及び関連諸領域に関する情報提供及び啓発、研究の振興、調査研究並びに評価により、薬剤学の進歩とその成果の利用普及を図る事業」

まえがき

今年度は公益社団法人としての責務を遂行するに当たり、上掲の「公益目的事業 1」を着実に推進するための事業計画を立案し、理事会を中心としたガバナンス体制の下、着実に事業の運用を図った。また、健全な財務基盤の確保も円滑な事業運営の課題であるが、事業ごとに精査を行い、こちらも適正運用の達成に努めた。

会長

1 APSTJ 2025 推進事業

- 理事会主導により、日本薬剤学会のこれからの方針 “APSTJ 2025” の検討・策定を行った。
- 日本学術会議が大規模研究のために策定しているマスタープランの推進についての検討を行った。
- 国内外の関連学協会との交流事業を推進した。

2 國際標準医薬分業推進事業

- 國際標準的な医薬分業（完全分業あるいは強制分業）への移行について、必要な情報を整理しつつ、実施に向けての戦略を立案し、関連団体と連携しながら行政への働きかけを推進した。

副会長総務担当理事

1 学会賞等表彰事業

1.1 学会賞	受賞者 原島秀吉
1.2 功績賞	受賞者 川嶋嘉明
1.3 奨励賞	受賞者 本山敬一, 中村孝司
1.4 タケル&アヤ・ヒグチ記念栄誉講演賞	受賞者 Patrick COUVREUR
1.5 タケル&アヤ・ヒグチ記念賞	---当期設定なし---
1.6 永井記念国際女性科学者賞	受賞者 望月眞弓
1.7 永井記念国際女性科学者特別賞	受賞者 Carmen Peña López
1.8 創剤特別賞	受賞者なし
1.9 優秀論文賞	---当期設定なし---
1.10 製剤の達人称号	受賞者 米持悦生, 青木 茂, 福田誠人, 根岸宗広, 丸山直亮, 山崎忠男, 岩佐昌暢, 谷本和仁, 田中 孝, 松原智子
1.11 國際フェロー称号	受賞者 Carmen Peña López
1.12 國際フェロー称号	受賞者 Patrick COUVREUR
1.13 「薬と健康の週間」懸賞論文	第 1 席 村田俊介

2 創剤開発・研究賞表彰事業

2.1 旭化成創剤開発技術賞	受賞者 松田 貴邦, 平岡 祥吾
2.2 旭化成創剤研究奨励賞	受賞者 岩尾 康範

専門委員会担当理事

1 学生主催シンポジウム事業

薬剤学に関わる学生の研究室・大学間を超えた活発な交流と、口演能力や講演会運営スキルを涵養する

ことを趣旨として、年会において学生主催シンポジウム SNPEE2016 を開催した。公募制にて学生演者を募集し、3名の学生演者に自身の研究の魅力を聴衆に伝えて頂いた。また特別講演の先生として豊富な海外研究経歴のある星薬科大学先端生命科学研究センター 加藤 良規 様をお招きし、将来の薬剤学を担う若手研究者に対する熱いメッセージに加え将来の薬剤学に関して海外の研究と国内の研究を踏まえた考察と本シンポジウムの講評を頂いた。

「The Future of Pharmaceutics～歩んだ道と夢が創る未来を語ろう～」

2016年5月21日

岐阜都ホテル

2 広報委員会事業

学会ウェブサイトの企画運営を通して本学会の活動の広報を行った。また、ウェブサイトの利便性向上させるため、コンテンツの見直しを行った。さらにウェブサイトに掲載されたイベント情報・関連学会情報を学会会員に対してタイムリーに提供するため、毎月ニュースメールを配信した。

3 医薬品の包装と情報分科会事業

薬剤学を支える包装・情報に関し、専門の研究者・技術者が協議し、本学会会員に情報発信を行うことを目的に、年会において「医薬品包装シンポジウム」を開催した。

「変わりゆく医薬品包装～ユーザー視点からの識別性・使用性を考える～」

2016年5月21日

長良川国際会議場

4 教育分科会事業

薬剤学に関わる教育問題について、専門委員が協議して提言を行う他、教育資料の企画、年会において以下のとおり薬学教育シンポジウムを開催した。

「新制度薬学教育課程を経た博士（薬学）、博士（薬科学）での大学院教育を考える」

2016年5月21日

長良川国際会議場

国際連携担当理事

1 英語セミナー事業

国際共通言語である英語での討議能力を養うため、訪日した海外研究者・国内の研究者等を講師として招聘し、講義・ディスカッションの全てを英語で行う Global Education Seminar を日本の各地区で企画した。

1.1 第1回英語セミナー

2016年9月2日

京都薬科大学

1.2 第2回英語セミナー

2016年10月22日

長崎大学

1.3 第3回英語セミナー

2017年3月3日

千葉大学

2 国際学会等協力事業

- FIP（国際薬学連合）

FIP の Predominantly Scientific Member Organization として、Council Meeting で重要事項を審議する他、FIP world congress of pharmacy and pharmaceutical sciences（ブエノス・アイレス、アルゼンチン、8月28日-9月1日）の Section/SIG にメンバーを多数派遣する等、BPS の諸活動に積極的に参画した。FIP・中国薬学会共催開催の Global Conference on Pharmacy and Pharmaceutical Sciences Education に理事を派遣した。

- 第1回日韓若手薬剤学研究者ワークショップを共催開催した（6月24日、25日、京都文化教育センター）

機関誌担当理事

1 「薬剤学」編集委員会事業

「薬剤学」誌の企画編集と「薬と健康の週間」懸賞論文を選考した。「薬剤学」のオンライン化にあたり、J-STAGE および学会 HP を利用した各記事の公開方針を整理した。なお、冊子体出版時の方針を継承し、原著論文については J-STAGE での Web 公開と同時に、他の記事は Web 公開の半年後から全情報を公開することとし、「薬剤学」の引用率向上に努めている。

2 投稿論文審査委員会事業

「薬剤学」誌への投稿論文を審査した。

3 学会誌出版事業

3.1 機関誌「薬剤学」

「薬剤学」編集委員会の担当する依頼原稿と投稿論文審査委員会の審査による一般論文で構成される「薬剤学」誌を以下のとおり発行した。(77巻2号はweb版のみ発行)

- Vol. 76 No. 3 2016年5月1日発行
- Vol. 76 No. 4 2016年7月1日発行
- Vol. 76 No. 5 2016年9月1日発行
- Vol. 76 No. 6 2016年11月1日発行
- Vol. 77 No. 1 2017年1月1日発行
- Vol. 77 No. 2 2017年3月1日発行

英文論文についても積極的な投稿促進を図った。

3.2 公式欧文誌「Journal of Drug Delivery Science and Technology」

昨年度構築した編集委員新体制にてJDDSTの購読促進を図った。

技術・書籍担当理事

1 製剤技術伝承講習会事業

製薬企業各社でのアウトソーシングの加速により、滅失が懸念されているわが国の製剤技術を次代の製剤研究者・技術者に継承するため、座学・実習の講習会を企画運営した。今期は以下のとおり開催した。

1.1 第19回シミック製剤技術アカデミー／製剤技術伝承講習会

「経口製剤の製剤設計と製造法」

2016年6月9-10日、7月14-15日 名城大学ドーム前キャンパス

1.2 第11回製剤技術伝承実習講習会

「製剤設計のための物性評価から剤形選択・処方最適化へのストラテジー」

2016年9月1-2日 星薬科大学

1.3 第12回製剤技術伝承実習講習会

「～難溶性薬物の製剤設計～」

2016年9月15-16日 大川原化工機株式会社 粉体技術研究所／
静岡県立大学薬学部 創剤工学講座

1.4 第20回シミック製剤技術アカデミー／製剤技術伝承講習会

「非経口製剤の製剤設計と製造法」

2017年1月12-13日、2月9-10日 名城大学ナゴヤドーム前キャンパス

2 製剤技師認定事業

医薬品メーカー等において製剤に携わる研究・開発・製造担当者で、日常業務の遂行上必要とされる共通の基礎的かつ専門的事項及び法規・制度の学識を修得している者を「製剤技師」として認定する。今年度も本認定試験の社会的な認知度とステータスの向上を図るために、様々な活動を開催した。今期の開催と認定者は以下のとおり。

2.1 第7回製剤技師認定試験

2016年10月22日 慶應義塾大学三田キャンパス／神戸薬科大学

2.2 第7回製剤技師認定者(26名)

池上祐樹、一林勇佑、上田義則、小澤翔太、佐藤正樹、首藤弘樹、杉浦大介、高橋祐紀、
樋谷友里、中村歩、中村優也、新津幸洋、橋本洋輔、福岡佳子、堀田敬紘、前田尚敬、
松岡誠、水谷仁弥、水原銀次、向井寛智、安田将之、山本一郎、吉澤省吾、吉田壽文、
吉田壯男、若山学

3 出版委員会事業

本学会の事業に関連する書籍の企画編集を行った。

3.1 製剤技術伝承講習会の10回までの内容をまとめた「製剤の達人による製剤技術の伝承」全2巻を2013年5月に発刊しているが、今回はその続編として11~20回の内容をまとめたものの編集を行った。

3.2 薬剤学会フォーカスグループ(FG)の活動に伴う各グループの代表的テーマを総説的にまとめたシリーズ書籍については、全FGに企画書作成を定期的に働きかけて早期の書籍化を目指している。薬剤学専門用語集については、メール審議を重ねながら具体的な企画を鋭意進めている。

製剤・創剤セミナー担当理事

1 製剤・創剤セミナー事業

大学・製薬企業・医療機関などにおいて製剤技術に関わる研究者・学生が一堂に集い、医療・薬剤学に關し、サイエンスとテクノロジーの觀点のみならず刻々と変化する時代のニーズも合わせて議論する合宿形式の討論会「製剤・創剤セミナー」を以下のとおり開催した。

1.1 第41回製剤・創剤セミナー

「医療社会のニューパラダイム～製剤・創剤のチャレンジ～」

2016年8月25-26日

淡路夢舞台国際会議場・ウェスティンホテル淡路

公開市民講演会事業担当理事

1 公開市民講演会事業

一般市民を対象とした公開市民講演会を企画し、今期は以下のとおり開催した。

2016年5月23日 學士會館

「国際薬学連合(FIP)会長を迎えて -21世紀の薬剤師を考える-」

FG 担当理事

1 FG 統括委員会事業

共通の研究目的等による分野横断的なユニットである各フォーカスグループ（FG）を統括する委員会として、事業・予算の管理を行い、各FGに対する助言やFG・理事会間のリエゾンを担当する。

- 【経口吸収FG】

経口吸収に関わる生体膜機能、吸収機構、体内動態、製剤化や臨床開発に至るまでの幅広い問題を統合し、新たな経口吸収研究を開拓するため、以下の討論テーマで合宿討論会を開催した。

・第7回経口吸収FG 合宿討論会

討論テーマ

「難溶解性薬物の製剤開発とその経口吸収性評価に関する研究」

「難吸収性医薬品の経口吸収改善に関する研究」

2016年12月15～16日

KKR ホテル熊本（熊本市）

- 【がん治療FG】

第26回日本医療薬学会年会において、前年度のアンケート結果に基づき、医療現場でがん化学療法施行時の副作用対策に難渋することが多い末梢神経障害にフォーカスを当て、以下のジョイントシンポジウムを開催した。また、同学会にてアンケート調査を行い(配布数470枚、回答数246枚)、「有意義なシンポジウムであったこと」および「副作用や薬物間相互作用、薬物動態に関して興味が高いこと」を把握した。

□ 第26回日本医療薬学会年会 シンポジウム

「抗がん剤による末梢神経障害：その対処法と最近の研究動向」

2016年9月18日 国立京都国際会館

- 【経皮投与製剤FG】

経皮投与製剤の基礎技術、経皮投与製剤の評価、今後の展望について学会員の理解を深めるために、化粧品、医薬品、生活化成品、素材メーカー、大学研究者など様々な分野の研究者を集め、以下のとおりシンポジウムを開催した。

第8回経皮投与製剤FGシンポジウム 2016年11月24日 タワーホール船堀・小ホール

- 【経肺経鼻投与製剤FG】

日本薬局方部会の製剤委員会・Inhalation WGで「吸入剤の送達量均一性試験法」および「吸入剤の空気力学的粒度測定法」がまとめられたのを契機に、吸入剤の試験法および生物学的同等性評価法について意見交換するため以下の研究会を開催し討論した。

・日本薬剤学会経肺経鼻投与製剤FG研究会

「吸入剤の試験法および生物学的同等性評価の最前線」

2017年1月20日

名城大学ナゴヤドーム前キャンパス

- 【核酸・遺伝子医薬FG】

核酸・遺伝子医薬 FG の目標である「デリバリーシステムの標準的評価方法の提案と基礎研究と核酸医薬開発との連携推進」の実現に向けて、日本薬剤学会第 30 年会において開催した核酸医薬デリバリー技術の標準化に関するラウンドテーブルでの議論の成果をもとに、核酸医薬および遺伝子医薬に対するデリバリー製剤の標準化に関する議論を進めた。その一環として、微粒子製剤の物性測定方法の「標準化」を念頭に、FG メンバーを中心に共通試薬を用いた微粒子製剤の粒子径測定に関する評価を行った。

【薬物相互作用 FG】

薬物相互作用予測手法の問題点、最新予測手法の医薬品開発への応用、製薬企業での申請時における薬物相互作用に対する取り組みの実例に関して意見交換および議論する場として、以下のシンポジウムを開催した。また、臨床薬理学会学術総会シンポジウム終了後にアンケート調査を行い、今後の FG の取り組みの参考資料とした。

・医療薬学フォーラム 2016／第 24 回クリニカルファーマシーシンポジウム 日本薬剤学会薬物相互作用 FG 共催シンポジウム

「薬物相互作用の的確なマネジメントに向けた取り組み 基礎から臨床まで」

2016 年 6 月 26 日

滋賀県立芸術劇場

・第 37 回日本臨床薬理学会学術総会 日本薬剤学会薬物相互作用 FG 共催シンポジウム

「薬物相互作用の課題と回避へ向けての展望」

2016 年 12 月 2 日

米子市文化ホール

【医療 ZD と完全分業 FG】

1. 「医療 ZD と完全分業」FG の活動目標：“To err is human”（人間は間違いから逃れられない動物）という国際常識がある。そして、「薬を一人の人物に任せるのは危険」であるという人類の叡智の所産として、「医師・薬剤師の 2 人制ダブルチェック（クロスチェック）」の欧米型の完全分業が形成され、それが法制化されて以来 800 年経過している。即ち、医師と薬剤師の二人が相互に監視し合い、医薬過誤（作為・無作為）を“可及的ゼロ”にする ZD (Zero defect) 運動の一つである。日本ではこの欧米型の完全分業が、明治維新により 1874 年に導入されたが、「薬剤師不足」を理由に 1889 年に「医師の調剤」容認に移行し、現在も存続している。この「医師の調剤」容認は、日本が先進国の中で唯一である。

しかし、上述の国際常識に反する国辱的事象が、政治を始め日本の社会で表立って取り上げられることは珍しく、例えば、「医師の調剤」が容認された現体制を“任意分業”と呼び、また「処方箋交付率」をもって、「分業率」と言う用語に置き換えるようなことが行われている。即ち、現在の日本の薬学・薬剤師を巡る環境は、医薬の安全保証のため存在することを第一義とする“医薬分業”的完全実施より、“薬業問題”的議論が先行している。

これは、従来連綿と培われてきた日本薬学・薬剤師の科学・実際技術の教育の伝統に由来するが、世界の薬学は、昨年中国南京市で開催された The Global Conference on Pharmacy & Pharmaceutical Sciences Education に示されるように、薬剤師は Specialist あるばかりでなく、Generalist でもあることが求められていることを認識し、「医師は処方し薬剤師は調剤する」という大原則が世界普遍の薬学であることを追求し、その基礎の上に構築されるべき諸問題を討論し、その成果を広報して、日本人一般の意識改革を進めるのが、「医療 ZD と完全分業」FG の目標と考えている。

2. 実施内容 (時期及び E-mail 討論テーマ)

本 FG は、上述 1 に目標を示したように、実施内容は主に E-mail 討論によるオピニオンを形成し、各メンバーが例えば学生への講義、集会での講演、会議の発言等介して啓発につとめることである。従って特に経費はかかるない

2016.04 “ファルマノミクス”(完全分業最優先)による医薬安全保証好循環

2016.07 さらば「本末転倒の薬学文化」

2016.11 いきつけ薬局とかかりつけ薬局

2016.11 日本の薬学神話創薬

2016.11 学生への投票呼びかけ

2017.01 完全分業のキーポイント

2017.02 分業に関する誤認識

【DDS 製剤臨床応用 FG】

年会においてラウンドテーブルを開催し、DDS 製剤のレギュレーション対応について議論した。第 32 回日本 DDS 学会学術集会において、第 3 回 DDS マッチングシンポジウムを開催した。メンバーの様々な経験や知識を共有化するため、合宿討論会を開催し、議論を深めるとともに「薬剤学」へのレポート寄稿による情報発信を行った。

年会ラウンドテーブル：「DDS 製剤のレギュレーション対応～品質・有効性・安全性の評価とその技術～」2016 年 5 月 20 日

長良川国際会議場（岐阜）第 32 回日本 DDS 学会学術集会：「第 3 回 DDS マッチングシンポジウム：振り返りと今後の提案」2016 年 7 月 1 日 グランシップ（静岡）

第 6 回 DDS 製剤臨床応用 FG 合宿討論会 2016 年 10 月 28 - 29 日 KKR ホテル熱海（熱海）
薬剤学レポート：「第 6 回 DDS 製剤臨床応用フォーカスグループ合宿討論会報告」

【個別化製剤 FG】

小児が服用しやすい製剤が市場に少ないという課題解決に向け、小児医療に関するシンポジウムでの発信および研究会の開催を行った。また、医療現場のニーズを把握するための研修を実施。さらに、小児製剤の研究開発を推進するため、小児用製剤開発のための産学コンソーシアムを発足した。

2016.5 第 31 回年会学術シンポジウムにて小児に使用できる添加剤の国内外情報の報告

2016.5 医療薬学フォーラムのシンポジウム「進展する小児用製剤開発の現状と取り組み」において FG の活動報告

2016.7 「日本の小児医療環境を考える」シンポジウム（摂南大学薬学部）の開催協力

2016.8 AMED 「小児医薬品の実用化に資するレギュラトリーサイエンス研究」（代表者 中村秀文）に参画し、産学コンソーシアムの枠組みの検討を開始。

2016.10～12 研究者が医療現場のニーズを把握するために「臨床薬剤現場研修」を実施。13 人が昭和大学病院で 5 日間実習。

2017.2 第 1 回研究会を大田区産業プラザで開催。53 名が参加。

2017.3 Pharm Tech Japan 臨時増刊号「小児用製剤 開発のヒントと最新技術(仮題)」を企画。

2017.3 小児用製剤開発のための産学コンソーシアム立ち上げ。

【物性 FG】

医薬品原薬、製剤原材料ならびに製剤の物性評価技術にフォーカスをあて、技術の発展や創薬/創剤への展開についての議論・提言を行う。本期は、新規レギュレーション提案のためのコンセンサス形成を目的とし、2016 年 5 月開催の日本薬剤学会第 31 回年会前日に物性 FG 主催サテライトセミナーを開催した。さらに、議論の成果を Chem. Pharm. Bull.誌、医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス誌に投稿した。また、若手研究者の研修・啓発・育成を目的とした研修会の開催のためのアンケート調査を行い、第 11 回製剤技術伝承実習講習会を共催した。

・物性・前臨床開発 FG ジョイントセミナー 2016：「本邦におけるコクリスタル医薬品の胎動－物性の理解から原薬・製剤の開発戦略まで－」

2016 年 5 月 18 日 ホテルグランヴェール岐山（岐阜）

・第 11 回製剤技術伝承実習講習会：「医薬品の原薬形態スクリーニングと結晶形のキャラクタリゼーションと製剤設計への応用」

2016 年 9 月 1-2 日 星薬科大学

【製剤処方・プロセスの最適化検討 FG】

2016 年度は 3 回委員会（6 月 2 日、10 月 4 日及び 2 月 8 日）を開催し、実習講習会やアンケート調査、FG 間の共同作業などについて、議論を行った。その結果、以下の活動を行った。

①アンケート調査

QbD の有用性を数値で示すことができるようなアンケート調査とすることになり、2 回にわたり PMDA 松田先生のご意見を頂き、(a) 逸脱・変更管理に関するアンケート、(b) QbD に関するアンケートは 2 種類として、web 調査とすることとした。このアンケートの内容について数回にわたり修正が必要となり、2017 年度の実施となった。

②QbD 実習講習会の開催

医薬品開発・製造現場の要望が強い実習をメインとした講習会を開催することとなり、最終的には 2 日間のプログラムとして、Risk 評価、実験計画法、最適化方法、管理戦略に至る一連の

流れについて 21 名の参加者を集めて実施した。

第 1 回 QbD 実習講習会（主催）

会場：星薬科大学新星館 2 階 209 講義室（東京都品川区荏原 2-4-41）

日時：2017 年 2 月 21 日（火）、22 日（水）

参加者：21 名（FG メンバーを除く）

実習報告を薬剤学に投稿：藤井拓也委員

③第 32 年会での発表

QbD 実習講習会で使用するために取得したデータについて、第 32 年会で、発表することとなつた。

演題：Quality by Design アプローチに利用される統計学的手法の習得を目的とした演習用データの構築

④他 FR との共同事業の検討

粉体プロセス FG（山本リーダー）と 2017 年度に共同でイベントを開始すべく、検討を開始した。実施は、2017 年度を予定。

⑤その他

2016 年秋に予定していた講演会は、実習講習会を充実・検討させるために時間的に、無理との判断から実施を断念した。

【臨床製剤 FG】

2016 年 6 月 3 日（金）～5 日（日）に浜松にて開催された第 10 回 日本緩和医療薬学会において公開シンポジウムと共に開催し、薬剤学会会員および緩和医療薬学会会員の緩和医療への製剤の関わりについて意見交換することができた。本シンポジウムに関しては「薬剤学」《レポート》 第 10 回日本緩和医療薬学会年会 「シンポジウム：緩和医療を支援する臨床製剤」に参加して名取伸行氏（科研製薬株式会社）により報告があった。

また、2017 年 3 月 24 日（金）～27 日（月）に仙台にて開催された日本薬学会 第 137 年会において臨床製剤 FG 企画立案によるシンポジウム「院内製剤の流れ - 上流（医療ニーズ）～下流（臨床応用）- に大学はどう関わることができるのか」を開催し、薬学会会員とともにこれら臨床製剤に関し討論することができた。

本シンポジウムについては「薬学雑誌」にて《誌上シンポジウム》として投稿済みである。

【粉体プロセス FG】

プロセスの高効率化、製剤の高機能化、高品質化を実現するための理論、技術、最近の技術動向などについて議論を深め、製剤技術の発展に貢献することを目的とし、以下のとおり年会においてラウンドテーブルの企画と合宿討論会を開催した。

・日本薬剤学会第 31 年会 ラウンドテーブル

「製剤操作の多機能化へのパラダイムシフト - 連続化・ハイブリッド化 -」

オーガナイザー：丹羽 敏幸、山本 浩充（リーダー）

2016 年 5 月 19 日 岐阜長良川国際会議場

・2016 年度 粉体プロセス FG 合宿討論会：連続生産プロセス・ナノ粒子の粉末化プロセス

2016 年 12 月 1-2 日 大阪コロナホテル

【前臨床開発 FG】

前臨床開発に関わる諸問題、例えば原薬形態の効率的な決定法、加速試験が困難な製剤の判断法、安全性試験の製剤設計などをテーマとして、学術内容にタイムラインやリスクマネジメントのビジネス視点を含めた議論を行った。本の出版を予定しているため、その議論も行った。2016 年度の開催事業は以下の通り。

・物性 FG との共催で、5 月の年会前日にサテライトシンポジウム「本邦におけるコクリスタル医薬品の胎動」を開催した。

・AAPS 年会において、AAPS Oral Absorption FG と共に開催でシンポジウム「Oral Absorption-Enhancing Formulations: Manufacturing Technologies and Challenges」を開催した（11 月、デンバー）。

【モデリング&シミュレーション FG】

薬剤学領域研究を効果的効率的に推進できるモデリング&シミュレーション技術の動向を調

査し、技術の普及を目指した活動を行った。今期は、モデリング&シミュレーション技術の普及活動の一環として、第31年会にて初歩的な技術セミナーを実施した。

・日本薬剤学会第31年会 ラウンドテーブル1：「演習で学ぶ今どきのデータ解析とシミュレーション」2016年5月19日 長良川国際会議場

2 製剤設計における種差の問題検討会（略称：製剤種差検討会）事業

2016年度より開始された製剤種差検討会は登録団体数が2017年3月末時点で36に達し、学会内外での認知度も高まっている。2回の事例報告会（オブザーバーとして国立衛研、PMDAも参加）を開催したほか、種々の広報・啓蒙活動（学会誌投稿3報、学会・講演会等6報）を実施した。

[事例報告会]

- ・第1回事例報告会（2016年9月18日、東大山上会館）：参加者68名
- ・第2回事例報告会（2017年1月13日、キャンパス京都）：参加者77名

[学会誌投稿]

- ・「製剤機械技術学会」誌、25, 133-139 (2016) に掲載
- ・「薬剤学」誌、76, 251-255 (2016) に掲載
- ・「薬剤学」誌、77巻3号にグラビアとレポートが掲載される予定

[学会・講演会活動]

- ・日本薬剤学会年会（5月、岐阜）のFGラウンドテーブル&ランチョンセミナーで活動紹介
- ・立命館大学創剤・製剤技術研究コンソーシアム合同研究会（6/3、滋賀）で活動紹介
- ・第12回目仏DDSシンポジウム（2016年10月、仏パリ）で活動紹介
- ・第6回DDS製剤臨床応用FG合宿討論会（2016年6月、熱海）で活動紹介
- ・第8回経皮投与製剤FGシンポジウム（2016年11月、東京）で活動紹介

制度改革担当理事【担当：金理事】

1 制度改革担当事業（制度改革委員会）

- 公益社団法人として、2018年度からの運用を目指して継続性のある主体的な制度に整える。

1.1 2018年度からの本学会の代議員制度の導入を図るために、新制度を策定したので、2017年5月総会にて承認を得る予定である。また、2018年度からの主体的な事務運営を目指し、機能強化と効率化するために、2016年度は事務局長が使用できる経理システムの新規導入および会計業務の業務委託（税理士事務所）と庶務業務の一部を担当できるパートタイム人材を採用した。他方、学会支援機構の委託業務項目の内、主に経理と庶務業務一部を見直した。

年会長

1 年会事業

本学会最大の学術集会「年会」の企画運営を行った。口頭またはポスターによる研究発表、特別講演、招待講演、各種受賞講演、各種シンポジウム、ランチョンセミナー、ラウンドテーブルセッション、企業展示会等の多種多様なプログラムを設けた他、若手の連携、ダイバーシティを意図した特別企画を行った。今期の開催期間およびメインテーマは以下のとおり。

1.1 第31年会

「清流から生まれる新たな製剤・創剤の世界」

2016年5月19-21日 長良川国際会議場、岐阜都ホテル

学会運営

1 理事会

学会の業務執行の決定、理事の職務執行の監督等を行う機関であり、法人のガバナンスを担う中心的な機能を果たすべく、以下のとおり理事会を開催した。

第1回理事会	2016年4月26日
第2回理事会	2016年5月18日
第3回理事会	2016年9月29日
第4回理事会	2017年1月31日

2 評議員会および総会

正会員で構成される学会の最高の決議機関である総会、また、この総会に上程される全ての議案について審議を行う機関である評議員会を以下のとおり開催した。

2.1 評議員会	2016年5月20日	長良川国際会議場
2.2 定時総会	2016年5月20日	長良川国際会議場

以上

(参考)事業別収支(損益ベース)一覧
2016年4月1日から2017年3月31日まで

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

事業名	経常収益計	経常費用計	当期経常増減額	備考
公益目的事業会計(公1)				
APSTJ2025推進事業	0	424,030	-424,030	
国際標準医薬分業事業	0	0	0	
学会賞等表彰事業	941,386	2,917,456	-1,976,070	
創剤開発・研究賞表彰事業	1,500,000	1,299,807	200,193	
広報委員会事業	0	36,391	-36,391	
医薬品の包装と情報分科会事業	0	190,210	-190,210	
教育分科会事業	0	5,702	-5,702	
学生シンポジウム事業	108	190,108	-190,000	
国際学会等協力事業	0	2,221,121	-2,221,121	
英語セミナー事業	81,000	396,344	-315,344	
機関誌出版事業	1,646,809	8,532,087	-6,885,278	
「薬剤学」編集委員会事業	0	330,212	-330,212	
投稿論文審査委員会事業	0	0	0	
出版委員会事業	0	0	0	
製剤技術伝承講習会事業	10,046,000	7,678,848	2,367,152	
製剤技師認定事業	1,724,000	1,179,700	544,300	
製剤セミナー事業	8,168,013	8,426,473	-258,460	
FG統括委員会事業	5,237,004	5,268,384	-31,380	
公開市民講演会事業	510,000	905,870	-395,870	
年会事業	38,916,372	36,913,548	2,002,824	
共通	12,073,000	4,997,405	7,075,595	
小計	80,843,692	81,913,696	-1,070,004	
法人会計	12,449,911	10,736,122	1,713,789	
合計	93,293,603	92,649,818	643,785	

貸借対照表
2017年3月31日現在

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

科目	当年度	前年度	増 減
I 資産の部			
1. 流動資産			
現金預金	29,745,977	26,056,853	3,689,124
未収入金	251,088	151,200	99,888
前払費用	1,781,344	5,456,681	-3,675,337
流動資産合計	31,778,409	31,664,734	113,675
2. 固定資産			
(1) 基本財産			
定期預金	20,000,000	20,000,000	0
基本財産合計	20,000,000	20,000,000	0
(2) 特定資産			
積立預金(タケルアヤヒゲチ記念基金)	35,000,000	35,000,000	0
積立預金(創剤開発・研究賞積立金)	625,349	425,156	200,193
積立預金(学術集会基金)	7,900,000	7,900,000	0
特定資産合計	43,525,349	43,325,156	200,193
(3) その他固定資産			
什器備品	2,103	4,200	-2,097
ソフトウェア	324,000		324,000
差入保証金	100,000	100,000	0
その他固定資産合計	426,103	104,200	321,903
固定資産合計	63,951,452	63,429,356	522,096
資産合計	95,729,861	95,094,090	635,771
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払費用	2,889,088	3,823,155	-934,067
前受金	0	0	0
前受会費	19,029,000	18,509,000	520,000
預り金	20,464	104,411	-83,947
仮受金	40,000	0	40,000
未払消費税等	550,000	100,000	450,000
流動負債合計	22,528,552	22,536,566	-8,014
負債合計	22,528,552	22,536,566	-8,014
III 正味財産の部			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	20,000,000	20,000,000	0
(うち基本財産への充当額)	(20,000,000)	(20,000,000)	(0)
2. 一般正味財産			
(うち特定資産への充当額)	53,201,309	52,557,524	643,785
正味財産合計	(43,525,349)	(43,325,156)	(200,193)
負債及び正味財産合計	73,201,309	72,557,524	643,785
	95,729,861	95,094,090	635,771

正味財産増減計算書
2016年4月1日から2017年3月31日まで

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

科目	当年度	前年度	増減
I 一般正味財産増減の部			
1. 経常増減の部			
(1) 経常収益			
基本財産運用益	94,257	216,000	-121,743
基本財産受取利息	94,257	216,000	-121,743
特定資産運用益	141,386	323,999	-182,613
特定資産受取利息	141,386	323,999	-182,613
受取会費	24,146,000	23,594,000	552,000
正会員	13,021,000	13,269,000	-248,000
学生会員	2,005,000	1,765,000	240,000
賛助会員	9,120,000	8,560,000	560,000
事業収益	68,502,209	61,431,695	7,070,514
学術集会・委員会等事業収益	62,845,400	56,682,386	6,163,014
参加費	33,996,000	31,929,000	2,067,000
助成金・補助金	2,004,000	2,073,000	-69,000
寄付金・協賛金	4,222,600	3,200,000	1,022,600
セミナー共催金	2,592,000	3,024,000	-432,000
講演要旨集等販売料	4,000	0	4,000
広告料	1,166,400	2,775,600	-1,609,200
出展料	18,860,400	13,680,786	5,179,614
学会誌等出版事業収益	1,646,809	1,399,309	247,500
購読料	1,255,047	790,819	464,228
投稿料・別刷料	195,480	226,800	-31,320
許諾料・使用料	196,282	335,034	-138,752
広告料	0	46,656	-46,656
学会賞等表彰事業収益	2,300,000	2,000,000	300,000
助成金・補助金	800,000	500,000	300,000
寄付金・協賛金	1,500,000	1,500,000	0
製剤技師認定事業収益	1,710,000	1,350,000	360,000
受験料	1,190,000	890,000	300,000
認定料	520,000	460,000	60,000
雑収益	409,751	1,198,762	-789,011
雑収益	408,658	1,194,815	-786,157
受取利息	1,093	3,947	-2,854
経常収益計	93,293,603	86,764,456	6,529,147
(2) 経常費用			
事業費	81,913,696	86,399,893	-4,486,197
給料手当	975,750	960,000	15,750
臨時雇入金	463,224	5,251,156	-4,787,932
会場費	14,157,618	11,124,846	3,032,772
旅費交通費	4,091,754	2,441,739	1,650,015
会議費	2,696,717	2,961,113	-264,396
関連行事費	7,727,101	6,628,632	1,098,469
賞状・賞牌・副賞費	3,823,600	4,392,361	-568,761
通信運搬費	1,694,342	2,596,085	-901,743
ウェブサイト管理費	2,201,710	1,668,232	533,478
消耗品費	1,133,063	566,863	566,200
印刷製本費	10,240,613	17,071,877	-6,831,264
貸借料	10,340,457	13,133,275	-2,792,818
保管料	0	252,720	-252,720
諸謝金	4,668,767	6,326,565	-1,657,798
支払負担金	1,618,523	1,774,564	-156,041
業務委託費	15,693,969	8,928,361	6,765,608
雑費	386,488	321,504	64,984
管理費	10,736,122	10,914,677	-178,555
給料手当	975,750	960,000	15,750
旅費交通費	1,593,275	356,655	1,236,620
会議費	1,181,246	3,131,770	-1,950,524
通信運搬費	1,068,940	1,337,155	-268,215
消耗品費	122,935	34,944	87,991
減価償却費	2,097	2,097	0
印刷製本費	459,748	414,844	44,904
貸借料	298,080	298,080	0
租税公課	550,000	100,000	450,000
業務委託費	3,126,902	2,918,009	208,893
公認会計士報酬	928,210	810,000	118,210
雑費	428,939	551,123	-122,184
経常費用計	92,649,818	97,314,570	-4,664,752
当期経常増減額	643,785	-10,550,114	11,193,899
当期一般正味財産増減額	643,785	-10,550,114	11,193,899
一般正味財産期首残高	52,557,524	63,107,638	-10,550,114
一般正味財産期末残高	53,201,309	52,557,524	643,785
II 指定正味財産増減の部			
当期指定正味財産増減額	0	0	0
指定正味財産期首残高	20,000,000	20,000,000	0
指定正味財産期末残高	20,000,000	20,000,000	0
III 正味財産期末残高	73,201,309	72,557,524	643,785

財産目録
2017年3月31日現在

公益社団法人日本薬剤学会

(単位:円)

貸借対照表科目		場所・物量等	使用目的等	金額
(流動資産)	預金	普通預金 三東UFJ/江戸川橋 三東UFJ/江戸川橋(セミナー) 三住/大塚 三住信/本店 郵振/会費 郵振/講習会 郵振/製剤セミナー バナー広告掲載未収額 加盟団体年会費, H28表彰副賞費等	運転資金として 同上 同上 同上 同上 同上 同上 同上 法人会計への未収額 法人会計への未収額 公益目的事業の前払分	6,588,905 5,226,136 10,024 0 1,352,745 11,213,588 9,974,268 1,969,216 251,088 1,781,344
	未収入金 前払費用			31,778,409
流動資産合計				
(固定資産)				
基本財産	定期預金	(定期)三住信/本店	公益目的事業に必要なその他の活動の用に供する財産であり、運用益を管理費に使用	20,000,000 20,000,000 20,000,000
特定資産	積立預金(タケルアヤヒゲチ記念基金)	(定期)三住信/本店 郵振/講習会	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業(ヒゲチ記念各賞表彰事業)に使用	43,525,349 35,000,000 30,000,000 5,000,000
	積立預金(創剤開発・研究賞積立金)	(普通)三住信/本店	公益目的事業(創剤開発・研究賞表彰事業)に使用	625,349 625,349
	積立預金(学術集会基金)	郵振/会費	公益目的保有財産であり、運用益を公益目的事業(年会事業)に使用	7,900,000 7,900,000
その他固定資産	什器備品 ソフトウェア 差入保証金	プロジェクター JDL 事務所借室学会センターピル	法人の管理運営に供している資産 法人の管理運営に供している資産 法人の管理運営に供している資産	426,103 2,103 324,000 100,000
固定資産合計				63,951,452
資産合計				95,729,861
(流動負債)	未払費用 前受会費 預り金 仮受金 未払消費税等	学会誌編集印刷費, 原稿料等 次年度以降会費 源泉所得税 郵振/会費, 三東UFJ/江戸川橋等 未払消費税等	公益目的事業の未払分等 事業及び法人運営の前受分 法人の管理運営業務に係る未払分 不明入金等の仮受分 550,000	2,889,088 19,029,000 20,464 40,000 550,000
流動負債合計				22,528,552
負債合計				22,528,552
正味財産				73,201,309

財務諸表に対する注記

1. 重要な会計方針

(1)固定資産の減価償却

有形固定資産の減価償却は定額法によっている。

(2)消費税等の会計処理

消費税の会計処理は、税込み方式によっている。

2. 基本財産及び特定資産の増減額及びその残高

基本財産及び特定資産の増減額及びその残高は、次のとおりである。 (単位:円)

科目	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
基本財産 定期預金	20,000,000	0	0	20,000,000
小計	20,000,000	0	0	20,000,000
特定資産 積立預金(タケルアヤヒケチ記念基金)	35,000,000	0	0	35,000,000
積立預金(創剤開発・研究賞積立金)	425,156	1,500,000	1,299,807	625,349
積立預金(学術集会基金)	7,900,000	0	0	7,900,000
小計	43,325,156	1,500,000	1,299,807	43,525,349
合計	63,325,156	1,500,000	1,299,807	63,525,349

3. 基本財産及び特定資産の財源等の内訳

基本財産及び特定資産の財源等の内訳は、次のとおりである。 (単位:円)

科目	当期末残高	(うち指定正味財産から の充当額)	(うち一般正味財産から の充当額)	(うち負債に 対応する額)
基本財産 定期預金	20,000,000	(20,000,000)	(0)	(0)
小計	20,000,000	(20,000,000)	(0)	(0)
特定資産 積立預金(タケルアヤヒケチ記念基金)	35,000,000	(0)	(35,000,000)	(0)
積立預金(創剤開発・研究賞積立金)	625,349	(0)	(625,349)	(0)
積立預金(学術集会基金)	7,900,000	(0)	(7,900,000)	(0)
小計	43,525,349	(0)	(43,525,349)	(0)
合計	63,525,349	(20,000,000)	(43,525,349)	(0)

4. 固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高

固定資産の取得価額、減価償却累計額及び当期末残高は、次のとおりである。(単位:円)

科目	取得価額	減価償却 累計額	当期末残高
什器備品	436,547	434,444	2,103
ソフトウェア	324,000	0	324,000
合計	760,547	434,444	326,103

5. 補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高

補助金等の内訳並びに交付者、当期の増減額及び残高は、次のとおりである。

(単位:円)

補助金等の名称	交付者	前期末残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	貸借 対照表上
助成金 Award Grant	(公財)永井記念薬学国際交流財団	0	800,000	800,000	0	注)
Conference Grant	(公財)永井記念薬学国際交流財団	0	1,320,000	1,320,000	0	注)
助成金 兵庫県淡路市	兵庫県淡路市	0	684,000	684,000	0	注)
合計		0	2,804,000	2,804,000	0	

※注)いずれも当該年度内に目的たる支出が完了するため、貸借対照表上の記載はない。

附属明細書

1. 基本財産および特定資産の明細

「公益法人会計基準」(平成20年4月11日、平成21年10月16日改正内閣府公益認定等委員会)に定める附属明細書の記載上の留意点に従い、財務諸表の注記3および4に記載しているので、内容の記載を省略している。

2. 引当金の明細

(単位:円)

科目	期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
	0	0	0	0
なし	0	0	0	0

以上

独立監査人の監査報告書

平成 29 年 4 月 14 日

公益社団法人日本薬剤学会

会長 今井 輝子 殿

馬目公認会計士事務所

公認会計士

馬目利昭



<財務諸表監査>

私は、公益社団法人日本薬剤学会の平成28年4月1日から平成29年3月31日までの平成28年度の貸借対照表及び正味財産増減計算書並びにその附属明細書並びに財務諸表に対する注記について監査し、併せて、貸借対照表内訳表及び正味財産増減計算書内訳表（以下、これらの監査の対象書類を「財務諸表等」という。）について監査を行った。

財務諸表等に対する理事者の責任

理事者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠して財務諸表等を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽の表示のない財務諸表等を作成し適正に表示するために理事者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

私の責任は、私が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表等に対する意見を表明することにある。私は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、私に財務諸表等に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表等の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、私の判断により、不正又は誤謬による財務諸表等の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、私は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表等の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、理事者が採用した会計方針及びその適用方法並びに理事者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表等の表示を検討することが含まれる。

私は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

私は、上記の財務諸表等が、我が国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠して、当該財務諸表等に係る期間の財産及び正味財産増減の状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

<財産目録に対する意見>

私は、公益社団法人日本薬剤学会の平成29年3月31日現在の平成28年度の財産目録（「貸借対照表科目」、「金額」及び「使用目的等」の欄に限る。以下同じ。）について監査を行った。

財産目録に対する理事者の責任

理事者の責任は、財産目録を、我が国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠するとともに、公益認定関係書類と整合して作成することにある。

監査人の責任

私の責任は、財産目録が、我が国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠しており、公益認定関係書類と整合して作成されているかについて意見を表明することにある。

財産目録に対する監査意見

私は、上記の財産目録が、我が国において一般に公正妥当と認められる公益法人会計の基準に準拠しており、公益認定関係書類と整合して作成されているものと認める。

利害関係

公益社団法人日本薬剤学会と私との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

監査報告書

公益社団法人日本薬剤学会
会長 今井輝子 殿

2017年4月18日

公益社団法人日本薬剤学会

監事 伊吹リンドウ
監事 斎藤堅之

私たちは、2016年4月1日から2017年3月31日までの2016年度における会計及び業務の監査を行い、次のとおり報告する。

1 監査の方法の概要

- (1) 会計監査について、帳簿ならびに関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続を用いて計算書類の正確性を検討した。
- (2) 業務監査について、理事会およびその他の会議に出席し、理事から業務の報告を聴取し、関係書類の閲覧など必要と思われる監査手続を用いて業務執行の妥当性を検討した。

2 監査意見

- (1) 収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表、財産目録、財務諸表に対する注記及び附属明細書は、会計帳簿の記載金額と一致し、法人の収支および財産の状況を正しく示していると認める。
- (2) 事業報告書及び附則明細書の内容は真実であると認める。
- (3) 理事の職務執行に関する不正の行為又は法令もしくは定款に違反する重大な事実はないと認める。

以上